

## 開放牛舎の「ボス」と「チビ」

酪農大学校 竹原 宏

私の学校の開放牛舎には、ジャージー20頭余りが雑居している。

開放牛舎で一番問題になるのが、牛の序列と処遇の問題である。この点は、階級意識の強い日本のお役人以上のものがある。休息室の一隈に、連動スタンションがあり、そこで餌つけをするのであるが、もし、ボスでも喰いはずしをすると大変な事態が起る。スタンションに首をはさまれて、身動きできない他の牛の腹を思いきり突いて廻るので、悲鳴をあげてなき叫ぶ。慌ててスタンションを開けると、こんどは恐れた牛達は、右往左往して互に索制し、二度とスタンションに首を入れようとしな。ボスはこの時とばかり悠然と首を突っ込んで、他人の餌まで平らげてしまう。

ボスの次に要領のよいのがチビである。大騒動を尻目にもくもくと餌を喰っている。この小さい若牛には、どういものか、成牛は手出し、いや、角出しをしない。牛も弱い者いじめをしないナイトスピリットか、母性愛のようなものを持っているのかもしれない。

ボスは、牛を群飼する最初の2日間程で決定される。他の動物と同様にトーナメント式の角突の結果、力の強かった者が、ボスの地位を獲得するが大抵の場合は、長老がボスになっている。次席以下の格づけもこの時に決ってしまう。

如何に体格が大きく、力の強い牛でも、新入りは皆がかりで四方八方から突かれて、2、3日は残飯ももらえない。甚しい時には、舎内に入れて貰えないことさえあり雨の日に終日ずぶぬれになって軒下にしょんぼり佇み、外を通る人に救いを求めるような眼差しをしている敗者を見かけることがある。このように、牛の社会も生存競争は激しくボスの座は高いのである。

このボスも、分娩などで1ヵ月位別の牛舎に移され、再び開放牛舎に帰ってくると、そのときは新入りとして処遇される。決して前宮礼遇の栄は与えられない。もうその時は、新しいボスがこの牛舎を支

配しているからである。

開放牛舎の搾乳は、この序列に従って行なわれる。決してこの順番はくるうことがない。作業員は、ミルクングパーラー（搾乳室）の中で、次にどの牛が入ってくるかを見なくともちゃんと解っておる。

搾乳が終ると放牧である。放牧地が一定しておれば、牛が道順を覚えてくれているのでその誘導は雑作ないことである。しかし、輪換放牧等で場所がかわっておると、この誘導には手をやくことになる。前の牛を追えば、後の牛が道草を喰い、後から追うと脇道に入り思う通りにならなから棒切れで牛の尻をたたいて廻ることになる。

「馬は索き、牛は追う」という諺があるが、私は牛の群を追うときは、何時も先頭にあって牛を引率して歩くのである。この時は、ボスをつかまえておく。そうすると、大抵の牛は、これについて来るものである。多少脇道にそれたり、道草をくう奴もであるが、幼稚園児の遠足くらいに心得ておくと、腹も立たない。ゆっくり歩いておれば、何時の間にか目的地に集っておる。日本人は、家畜の調教が下手だと云われておる。日本人は短期だから牛ののろまが理解できないのであろう。牛を追う時も、自分の速度に合せたいからむやみに尻をたたいて急がせる。牛と歩くときは、字の如く牛歩であるくことが必要である。もう一つ気のついたことは、黙って牛の尻をたたいて追う人が多いことである。声をかけて追う方がよい、馴れてくると声だけでも牛が動いてくれるものだ。

私は牛を呼び寄せる時は、「ホー、ホー」と呼ぶ。また、追うときは、「へい、へい」と云う。前者は、私の作った言葉で意味はない。「へい、へい」と呼ぶのはレッキとしたビルマ語である。ビルマ人は、「へい、ノア」（ハイ、牛）と云って牛車を操っている。私も用いてみてなかなか実感があって良い言葉だと思っている。

蒜山は、雪深い処である。根雪どきになると道の両側が高くなり、丁度、川底を歩くような格好にな

## 岡山畜産便り 1964.06

る。牛を調教するにはお誂えむきで、横道に逸れることがない。朝、チビを集めて食前の訓練を行うのであるが、育成牛舎から校門まで駈足をやらせるのである、一ツは牛の鍛錬と云う意味もあるが、例の「ホー、ホー」と「ヘイ、ヘイ」の基礎訓練をしつけるのが目的である。この冬の訓練を充分やっておくと、夏場の放牧に非常に役立ち、号令一下牛の大群を隊伍堂々と自由に動かせるのである。